

繪本

徒然草

上



橋本 治……文

田中靖夫……絵

繪本

徒然草
上

橋本 治…文
田中靖夫…繪

河出書房新社



絵本 徒然草 (上)

橋本 治・文
田中靖夫・絵

橋本治 (はしもと・おさむ)
一九四八年三月二十五日、東京に生まれる。東大文学部卒業後、イラストレーターとして働いた後、『桃尻娘』で作家としてデビュー。以来、小説、評論エッセイ、翻訳等諸分野で活躍。主著『暗野』『運と刀』『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ』『男の編み物手トリ足トリ』『桃尻語訳枕草子』『橋本治雑文集成パンセ (全7巻)』『窠変源氏物語』 (全14巻)

田中靖夫 (たなか・やすお)
一九四一年四月十八日、茨城県日立市に生まれる。桑沢デザイン研究所写真科を卒業後、自動車メーカーにてカーデザイナーとして働き、一九八一年イラストレーターとして独立。一九八八年(有)タナカインク設立。主著、銅版画集『滑走する足』、画集『JUST ANOTHER WORLD』

初版印刷 一九九三年六月一日
初版発行 一九九三年六月一〇日
発行所 河出書房新社

発行人 清水 勝

TEL 東京都渋谷区千駄ヶ谷二一三二一(〇三)三四〇四一八六一(編集)

三四〇四一二〇(営業)
振替(東京)〇一〇八〇二

印刷 三松堂印刷
製本 小泉製本

編集 K&K事務所
刈部謙一

装幀 宇治品

©1993 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁・乱丁本はお取替いたします
ISBN4-399-00835-6

青年編

序段

第一段

第三段

第四段

第五段

第六段

第七段

第八段

第九段

第十一段

第十二段

つれづれなるままに

いでやこの世に生まれては

よろづにいみじくとも

後の世のこと

不幸に愁へに沈める人の

わが身のやんごとなからんにも

あだし野の露消ゆる時なく

世の人の心まどはす事

女は、髪のめでたからんこそ

神無月のころ

同じ心ならん人としめやかに物語して

第十三段

第十四段

第十九段

第二十段

第二十一段

第二十五段

第二十六段

第二十九段

坊主編

第三十五段

第三十六段

第三十九段

第四十段

ひとり燈火のもとに

和歌こそなほをかしきものなれ

折節の移りかはるこそ

なにがしとかやいひし世捨人の

よろづのことは

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に

しづかに思へば

手のわろき人の

久しく訪れぬころ

ある人、法然上人に

因幡国に何の入道とかやいふ者の娘

第四十三段
第四十五段
第四十六段
第四十八段
第五十二段
第五十三段
第五十四段
第五十九段

春の暮つかた
公世の二位のせうとに
柳原の辺に
光親卿
仁和寺にある法師
これも仁和寺の法師
御室にいみじき児のありけるを
大事を思ひ立たん人は

繪本徒然草
上

青年編



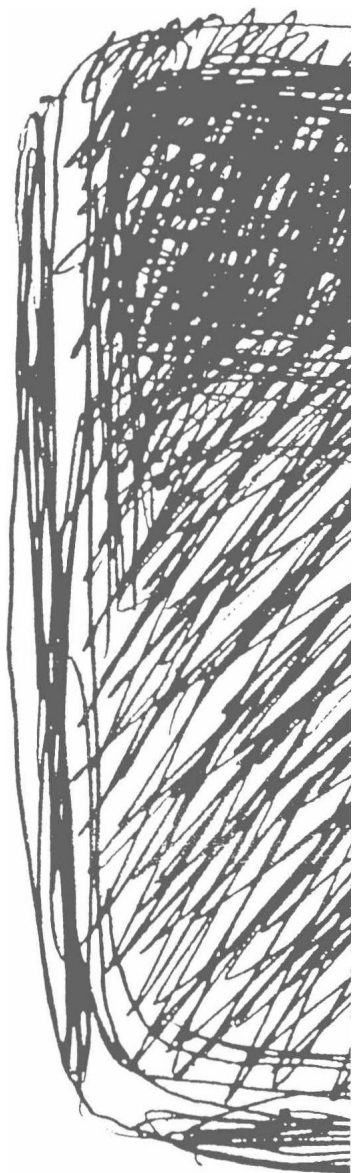
【序 段】

つれづれなるままに日くらしすざり碗にむかひて、心につりゆくよしなし事をそこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

くつ

退屈で退屈でしょーがないから一日中硯^{すずり}に向かって、心に浮かんで来るとーでもいいことをタラタラと書きつけてると、ワケ分かんない内にアブナクな
ってくんなッ！

たい、



【第一段】

いでやこの世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。

御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんことなき。一の人の御有様はさらなり。ただ人も、舍人など給はるきはは、ゆゆしと見ゆ。その子孫までは、はふれにたれどなほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつつ時にあひしたり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるるよ」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にののしりたるにつけて、いみじとは見えず、増賀ひじりの言ひけんやうに、名聞ぐるしく、仏の御教にたがふらんとぞおぼゆる。

ひたふるの世捨人は、なかなかあらまほしきかたもありなん。

人は、かたちありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ。物うち言ひたる、聞きにくからず愛敬ありて、言葉おほからぬこそ、飽かず向はまほしけれ。めでたしと見る人の心おとりせらるる本性見えんこそ、口をしかるべけれ。しなかつちこそ生れつきたらめ。心はなどか、賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち心ざまよき人も、才なく成りぬればしなくだり、顔憎さげなる人にも立ちまじりてかけずけおさるこそ、本意なきわざなれ。

ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道。また有職に公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手などつたなからず走り書き、声をかしくて拍子とり、いたまじうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

そうだよな！ この世に生まれてるんだから、期待してもいい事っていうのは、絶対多くていい筈だよな！

帝の位は、ちよつと畏れ多すぎるな。竹の園生の下つ葉まで常人の血筋じゃないんだから、尊いじゃないか。一の人の様子っていうのは、しょうがないよな。ただの貴族でも、舎人なんかを給わつてる身分は、大したもんに見えるさ。その子や孫までなら落ちぶれちゃつても、やつぱり品があるな。それより下の方となると、家柄相応なりにさ、時流に乗つて得意顔してるのも、自分じゃスゲエと思つてるみたいだけど、ロクでもないよな。

坊主ほど羨ましくないもんはねえよな。「人には木の端切れみたいに思われてんのよ」って清少納言が書いてんのも、実際、言えてるよな。大物になつて世間が大騒ぎしてたつて、大したもんじゃない。増賀上人が言つてたとかつてみたいに、名声は



毒だしな、み仏の教えとは違つてんじゃないのつてさ、思うよな。純粹の世捨て人なら、なかなかいいところもあるんだろうけどな。

人間は、顔と見た目がすぐれてるつていうのが絶対、理想なんじゃないの。ちよつと話をしてるんでも、耳ざわりじゃなくて魅力があつて、言葉数が多くない人つていうのが絶対、長いことでも向きあつていたいよな。立派だと思つてた人が、幻滅しちゃうような本質を見せちゃうつていうのはさ、残念だよな。身分や容貌つていうのなら生まれつきだろうさ。中身はどうかな？「賢明から更に賢明へ」つて、変えようとするば変わるんじゃないの？顔や氣立てがいい人だつても、知性がなくなつちゃえば、下等になるし、品のない顔をしてる人間の中に入つて簡単にブツつぶされちゃうつていうのが絶対、残念無念なことなんだよな。

持っていたいものは、本格的な学識教養、漢詩、

和歌、音楽の才能。あと、有職に儀式の方——これで人の手本になるつていうのが最高なんじゃないかな。字なんか下手じゃなくて走り書きでな、いい声で拍子リズムとつてな、迷惑そうにはしても、下戸げこじゃないつていうのが絶対、男はよし！ だな。



序段第一段の註

へい、バディ！ アイム・グレイト・ケンコー・
オブ・ザ・ボーズ——即ち、私があの偉大で有名な
吉田の兼好法師じゃ——というのは、まア間違いだ
な。吉田というのは私の実家のあつた神社の名前で、
吉田の兼好法師つつたら「新田の田吾作」とおん
なじことになつてしまふ。私の家の姓は、吉田じゃ
なくて卜部だからね。私のことを正確に言うんなら、
これは卜部の兼好法師ということになるんだが、し
かしこれもまた間違ひじゃわな。

だつてあんた、私は坊主だもの。家を捨てたから
こそ「出家」といつてな、坊主に家はいらぬ。苗
字なんかなしで、ただのケンコー法師というのが正
しい。まア、その兼好法師が吉田神社の家から出た
というんで、これを「吉田の兼好法師」と呼ぶんな

ら正しかろうが、だからといって私の名前は、吉田
兼好なんかじゃないんだぞ。どうしても苗字をつけ
て呼びたい、フルネームじゃないと試験にバツ点が
付きそうだというんなら、私のことは「卜部兼好」
と呼びなさい。それが私の出家前の名前なんだから、
それが正しい。分かつたな、お若いの。私にはな、
卜部兼好と兼好法師の、二つの名前があるんじやよ。
二つの顔を持つ坊主、それが私じやよ、フツフツ
(なにを言つとるんじやか——)。

人間、出家になるつつうことはな、世の中を捨て
るつつうことじやよ。それまでの自分を、全部捨て
てしまふのな。だもんだから、坊主になると、今ま
での名前とは違ふ坊主ネームを名乗る訳じやな。増
賀上人の増賀というのもそうじやがな。増賀上人の
元の名をなんというたかワシヤ知らぬ。変わったお
人でな、若い頃には、そのお師匠様が坊主として出
世をした、そのお礼言上に参内するお供についとつ

て、その時に「名声は毒だ！ 乞食がいい！」って
言ったっていうからなア。日本のアシジのフラン
クスコじゃなア——西洋の坊主だよ。

まア、そういうお上人もおったんだが、私はな、
坊主になったといつてもどこぞの寺におさまってジ
ーツとしてたというのは違つてな、坊主になつて
からもアッチコッチをウロウロしつた。まア、自
由な気分をエンジョイしちゃつとつたんだが、まア、
私はそういう坊主だからね、出家して坊主になつた
からといつて、特別な名前をつけるといふのは、殊
更らしくていやじゃつた。だもんだから、それまで
の兼好という名前を音訓みにしてな、ケンコー法師
ということにしちやつたという訳なんじゃよな。

まア、「なにをウダウダ、どうでもいいことを言
つとるわい」なんてことを思わつしやろうがの、そ
れにも少々訳があるんじや。

ええか、私は兼好法師だよ。しかしなア、ちよつ

